全員縛られるまで
出られまテン

全員縛られるまで出られまテン

EntsCat

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=20346783

R-18, モ腐サイコ100, 霊幻総受け, 縛師(もぶ神), 緊縛, 攻めの控え目な喘ぎ, 本番無し

さくらんぼがりの後日談です。単品でもお楽しみいただけます。師匠総受けです。今回本番ありません。攻めや統一郎の控え目な喘ぎがあります。縛師（もぶ神）が出て来ます。良ければどうぞお付き合いください。倫理がアレです。

いつもいいねやブクマ、絵文字やコメントなどありがとうございます！とても励みになっています🌸
マシュマロもありがとうございます〜！https://marshmallow-qa.com/entscat?utm_medium=url_text and utm_source=promotion

Table of Contents

全員縛られるまで出られまテン

・こちらは霊幻新隆と影山茂夫、影山律、エクボ、芹沢克也、花沢輝気、鈴木将、最上啓示、ヨシフがセフレをしているという、特殊設定となります（霊幻が総受けです）

・影山茂夫、影山律、エクボ、芹沢克也、花沢輝気、鈴木将、最上啓示、ヨシフ、鈴木統一郎は霊幻新隆被害者の会のメンバーです

・鈴木統一郎も登場しますが霊幻との絡みはありません

・攻めたちは仲良しです

・ここは倫理の辺獄です

「出られない部屋というのを新隆くんのパソコンで見てな」
にこ……と微笑みながら大悪霊、最上啓示が言う。
「面白そうだと思って作ってみた」
「作っちゃったかー！」
最上の言葉に霊幻はひたいを押さえた。
「まただ……また霊幻新隆の護衛仕事でトンチキ事件に巻き込まれた……もう嫌だ……」
さめざめと顔を覆う鈴木統一郎の肩を、慰めるようにヨシフが叩く。
「で？お決まりのセックスしないと出られない部屋ってやつか？そんなの簡単に出られるぞ、霊幻がいるんだから」
「ああ、面白そうだから『全員縛られないと出られない部屋』にした」
「……はあああ！？」
広い部屋の奥に縄を持った白装束の老婆が3人、顔に白い紙を貼り付

けて座っているのは、どうやら縛師だったようだ。
「キミたちが不様に縛られて転がってるのは、さぞかし愉快だろうと思ってね」
「……最上さん、この間飲み会に誘わなかったの怒ってる？」
おそるおそる影山茂夫が問いかける。
「ちいとも怒ってなどいないさ」
「だって最上さん用事あるって言ってたから……」
「怒ってなどいないと言ってるだろう！？……ん？何かね、ご婦人方？」
わらわらと最上にも縄を当ててみている老婆たちに、戸惑った声を上げている。
「そりゃあ『全員』なんだから最上も入ってるだろ」
「…………しまった！」
「馬ーーーー鹿」
「人を呪わば穴二つって本当なんだな……」
霊幻は哀れなモノを見る目で最上を見ている。
この部屋は最上啓示が力を込めた強力な呪い部屋だ。一度発動した呪いは、最上本人でも解くのは難しいと言っていた。条件を満たす方が早い。
「はぁ……仕方ない、縛師と相談するか……」
「あのお婆さんたちはなんなんですか？」
「ん？ああ、縄の化身だよ。神様だ」
「神様呼んじゃったんですか！？」
「日本の八百万の神々は神によっては意外とフランクだぞ」
驚く茂夫にさらりと最上が答える。
「特に縄神は人間に近い。しめ縄や土俵の結界など、人間と神々の間を取り持っているからな」
「はー、そうなんですか……」
「それをイタズラに使ってたら世話ねえよ」
「そこはほら、最上さん悪霊だから……」
ぼやくヨシフに霊幻が返した。
「では縛られる順番を決めよう。最初の方に縛られるほど緊縛時間が長くなるから、そのつもりで」

「じゃあじゃんけんで決めようぜ」
「あっ師匠ずるい」
「うむ、いいんじゃないか？」
「ほらゲームマスターがこう言うんだからじゃんけんじゃんけん」
予想通り、霊幻が勝って最後になった。
「……どうして私が……」
最初は統一郎である。
「では、カタログを見たまえ。身体の柔軟性が求められる縛られ方もあるから、縛師に確認するといい」
統一郎は最上から渡された写真付きカタログをめくる。
「……手が後ろに回るのは嫌だな。この肘掴み前手縛りで」
統一郎がカタログを指差すと、ひそ、と縄神が最上に耳打ちする。
「『この縛りは胸が強調され、乳首責めに適している』……と言っているな」
「説明しなくていい！！」
「あと、『シワが残るからスーツの上着は脱いだ方がいい』とも」
「……」
統一郎は黙ってスーツの上着を脱いで、おあつらえ向きに用意してあるハンガーにかけて、ハングバーに下げた。
「座布団の上にあぐらか正座で座って欲しいそうだ」
「……」
統一郎は座布団の上にあぐらをかく。
「では、はじめるぞ」
老婆が白い盃を統一郎に差し出す。
「これはなんだ？」
「縄酔いをしすぎるのを防止する、酔い止めだそうだ」
統一郎は少し躊躇ってから、盃の中の液体を飲んだ。
（ミント水？か？）
冷んやりするような飲み口に戸惑っていると、しゅるりと胸の下部に縄が回された。
「っ、」
肺が締まる。呼吸とは上半身全体でしているのだ、ということを統一郎はまざまざと自覚させられる。

「っは、……ぅ……」
しゅるしゅると胸の上部まで緊縛が手際良く進み、呼吸が浅くなる。
ぐら、と。
（あ……？）
息苦しさが、妙な酩酊感を統一郎にもたらした。
「……ッ、ん……」
鼻にかかった声が出て、統一郎は赤面する。
「……み、見ないでくれッ……！」
切迫詰まった声にぎょっとして、居た堪れなさにほとんどの人間が目を逸らす。
最上、ヨシフ、エクボは安全のために見続けていた。
「あぁっ、こんなッ……嘘だろう……！？」
縄が肌を滑る感覚がびりびりと背筋を走って、統一郎は唇を噛む。
「んッ……う！」
左の肘を右手で握らされて固定され、身を捩って快感から逃げることも出来なくなる。
「なんで私がッ……こんな目にぃッ……！」
右の肘と左手も固定され、いよいよ縄酔いも深くなる。
『仕上げです』
念話で縄神から話しかけられ、ぎくりと統一郎は嫌な予感に身をこわばらせる。
「待っ……！」
しゅる！と縄を張られて。
「───ッ！！！」

たまらず目を閉じた統一郎は、喉をさらして息を詰めた。

「……お疲れ。次は影山茂夫だな。どの縛りにする？」
座布団に座ったまま縄に耐える統一郎をあまり視界に入れないように気遣いながら、ヨシフが茂夫にカタログを差し出す。
「あ、その前にちょっと」
鈴木将がスマホでパシャリと統一郎の写真を撮って、ビクリと統一

郎が顔を上げる。
「将っ！」
「将くん、それはちょっと」
さすがに霊幻が止めると、複雑な顔をして将は統一郎を見る。
「いや、コレ俺が証拠持ってないと、ややこしい事になるんだよ」
霊幻は首を傾げる。
「かあちゃんＡＶですらいい顔しない人でさ、めちゃくちゃ浮気？に厳しいのよ。今日家に帰るのに、縄の痕がかあちゃんに見つかったらどうなると思う？」
さっと統一郎の顔が青くなる。
「修羅場ぁ……」
「まあまず風俗に行ったと思われるわな」
「そういうこと。というわけで俺が写真見せて、仕事だったって証言するわけ」
将はスマホをポケットにしまった。
「いよいよ鈴木さんが可哀想になってきた……」
「ま、親父は昔のツケを払い続けてんじゃね？で、律の兄貴はどれにすんの？」
霊幻に返事をしながら将は茂夫の手元を覗き込む。
「……この、前手梯子縛りでお願いします」
ひそ、と縄神が最上に耳打ちする。
「『こちらは胸を腕で寄せて上げる縛りで、言うなればキャイーン縛りです』だそうだ」
「古っ！？若者たちポカンとしちゃってるから！」
「では影山少年も上着を脱いで、座布団に座ってくれたまえ」
霊幻のツッコミを流して最上は茂夫を座布団に誘導する。
す、と老婆が差し出してきた盃を、茂夫も口にした。
老婆が誘導するままに茂夫が両手を伸ばして合掌すると、ぐいと老婆が手首を引っ張る。
「……っ」
しゅるしゅると手首を縛られると、肩から動かせなくなる。
そのまま梯子状に、ギチギチと腕が棒のように縛られていった。
（腕が……動かせない……！？）

肩甲骨が強制的に開かれ、肺が横から押される。
はっ、はっ、と浅い息を茂夫は繰り返した。
『引き絞ります』
縄神からの念話に茂夫はハッとする。
「う、ぐ……！」
絞られた縄で息が詰まった茂夫の目の前が、ぐわんと揺れた。
死を錯覚した身体が、じわじわと性感を起こさせる。
（あ、まず、まずい……ッ）

カリ、と茂夫は唇の端を噛んだ。

「……次はエクボだな」
「おー。俺様はスタンダードに肘掴み後ろ手縛りで頼むわ」
エクボはすたすたと上着を脱ぎながら座布団に向かい、どっかとあぐらで座り込んで盃をあおった。
（まあ、縛りが始まったら身体から抜けりゃいいだろ。吉岡には悪いが……）
しゅる、と縄が胸の下部に回された瞬間に。
「ゔっ！？」
ビシ、と縄神に締め付けられてエクボは呻いた。
「ぬ、抜けられねぇ……！？」
「そりゃそうだ。私の呪いに加えて神々の結界だぞ？抜けられてたまるか」
うぐ、とエクボが顔を歪める。
しゅる、しゅると緊縛が澱みなく進んで、息を詰めた。
「はっ……は、う……ッ」
肌を滑る縄の感触が、びりびりと背筋を泡立たせる。
「や、めろ……っ！」
身じろぐエクボを戒めるように、ぎっ、と縄神が縄を引き絞った。
「う、ぐ……！」
じぃん、と甘イキしてエクボは眉を寄せた。
「ん……ん……！」
色っぽい声にドギマギと、ギャラリーは目線を床に落とす。

「は……ん、んッ……！」
ぎり、と腕を後ろで固定されて、エクボは身体を丸めてビクリと震えた。

「……クソがッ……」

「……じゃあ芹沢、どれにする？」
気まずそうに霊幻はカタログを差し出す。
「えと……両足一本梯子縛りで……」
「『人魚っぽいアレ』って言ってるな。芹沢くんは身体は柔らかい方か？」
「いや、あんまり……」
「じゃあズボンを脱いで布団に座ってくれ、とのことだ」
芹沢は先に盃をあおってから、スーツのズボンを脱いで布団に座った。
「う、うッ！？これ……こんなんなんですか！？」
「……そうだ……」
縄の感触に戸惑う芹沢に、息の浅い統一郎が諦めたように返す。
「うあっ……ちょ、これ、ヤバ……！」
足には性感帯が多い。太ももの内側を縄が通っていく度に、ビクビクと芹沢は身体を揺らした。
「あー、あ、これ、恥ずかしい、な……ッ」
『仕上げますよ』
縄神の言葉に芹沢は緊張する。
「うぐ……ッ！？」
ぎゅし、と縄を引っ張られて、芹沢は腕に顔を埋めて快感に耐えた。

「じゃあ次は花沢か」
ヨシフがカタログを差し出す。
「う、うーん……じゃあ……」
「あ、『そろそろ吊りも入れたい』だそうだ」
「……えぇ……」

「『まずは両手吊とかどう？』とのことだ」
「……じゃあそれで」
盃をあおって、花沢は突然現れた滑車の下に立つ。
「服は脱がなくていいんですか？」
「手首だけだからいいそうだ」
腹の前でしゅるしゅると手首を固定され、きょとんと花沢はその動きを見ていた。
手を縛り終えた縄神が、縄尻を滑車に通す。
『吊ります』
ぐ、と身体を持ち上げられて、花沢は息を詰めた。
『痛みが出たら言ってください』
「ぐっ！？」
ぐんと腕を引かれて、花沢はつま先立ちになる。
「ちょっ……！い、いた……っ！」
肩がきしんで、ぶわっと冷や汗がにじむ。
『緩めます』
ふわ、と縄を緩められて、じわんと解放感に身体が満たされる。
「は、ぁ……」
急激に血が巡り出す感覚に身体が熱くなる。
「ん、……ッ」
目を伏せて、花沢はぶるりと震えた。

「僕は普通に！」
「『エンジンかかってきた、次は背中吊りたい』だそうだ」
「人の話ききませんね！？」
「日本の神々なんてそんなもんだぞ」
律は苦虫を噛み潰したような顔で盃をあおる。
「ちゃっちゃと終わらせてください」
花沢とは別の滑車の下に律が立った。
腕ごとしゅるしゅると上半身が縛られる。
「……ッ」
縄が滑るたびにゾクゾクと身体が震えて、律は息を詰めた。
「は、……ッ」

菱縄縛りが完成して、律はたまらず熱いため息を漏らす。
（終わっ、た……？）
『吊ります』
ぐん、と上半身を持ち上げられて、かはっと律は苦悶の声を出した。
「苦っ……し……！」
『ゆるめます』
す、と足が地について。
一気に流れ込んだ酸素がぐわんと律の頭を揺さぶる。
「ぁ……う……！」
びびびび、と痺れが尾てい骨まで走って。
「んっ……」
眉を寄せて、律は息を止めた。

「……次は私か。まあ、霊体だからな」
ぽん、と縄神が最上の身体に触れると、ずし、と久しぶりの重力がかかる。
「！？」
縄神は３人がかりで最上の身体に縄をかけた。
「ちょっ待っ強制実体化するならすると言ってくれ！」
脇の下や股間に通される縄に最上は小さく吐息を漏らした。
「あ、あー……なるほどこれは……っ、はぁっ……」
ぐん、と腕が頭の後ろに回され、喉と二の腕がさらされる。
「……っ、ン……」
震えをいきんで、必死に逃した。
ひそ、と縄神が囁いたのに、最上は目を見開く。
「待て待て待て無理無理無理……っぁ……！」
ぐん、と腕と足首を吊られて、最上の身体が宙に浮かんだ。海老反り吊りだ。
「人体じゃないからって……！無理矢理やりおって……！あ、あァ……ッ！！」
ビクン、と身体を震わせて、最上は眉を寄せて目をキツく閉じた。

「……俺は何になるんだ？」
煙草を携帯灰皿に押し込んで、ヨシフが上着を脱ぐ。ひきしまった身体を縄神が嬉しそうに見分する。
「『後ろ手石抱き縛り』にしたい……そうだ……」
息も絶え絶えに最上がつぶやく。
「『猫があぐらの真ん中で寝ちゃって動けない縛り、と言ってもいい』……とか……」
「いやそういうのいいから」
縄神に誘導されてヨシフは布団の上に寝かされる。
足をあぐらの形にされ、しゅるしゅると固定された。
「……っ、ん……」
隠部を挟むように縄を通されて、眉を寄せる。
手を後ろで縛られた後、肩に縄をかけられて、ぐんと前に倒されて足首に結ばれる。
「う……！」
（なるほど、石抱き縛り）
身体を丸めた形にされ、思わぬ苦しさにヨシフは息をつく。
「ん、ん、〰〰〰〰っ……」
ぶるり、と震えて、舌打ちした。

「……えーっと、じゃあお後がよろしいようで……」
「「「「「「「「「早く縛られろ（てください）！」」」」」」」」」
「ひぃっ」
身悶える淫蕩窟みたいな面々に怒鳴られて、霊幻はしぶしぶ縄神についていく。
「えっ？」
上着を脱ごうとした霊幻を制して、縄神はボタンだけ外させる。
「『さいご……だから、スーツもいい感じに……したい』……だ、そうだ……」
「だ、大丈夫か？最上さん？」
返事は無い。
「あっ……」

霊幻のベルトを抜き、縄神はズボンを足元に落とした。
『脱がされたズボンが足元にわだかまっているのもいとあはれ』
「えっ何！？」
霊幻が念話に驚いている間に、かすかにシャツのすそが微かにかかる白い右足を膝をまとめて縛り、竹棒に吊る。
「ん……！」
がばっと足を広げさせられて、霊幻はかあっと赤くなる。
「あっ……なんだ、これぇ……っ」
胸の上を通る縄に、はぁっと霊幻はたまらない声を漏らした。
「やぁっ……うっ、んぁっ……！」
ぎゅし、と後ろ手に縛られた背中を引き絞られて、ぐわんと襲う心地よい縄酔いに甘い声をこぼす。
「はっ……はっ……」
『吊ります』
ひゅっと霊幻は息を飲み込んだ。
「待、待っ……！」
ぐん、と上半身の縄が竹棒にかけられ、ぐっと股間の縄が陰茎に食い込んだ。
「あぁあああぁっ♡♡♡♡」
身じろいで快感を逃すこともできない哀れな身体に、容赦ない悦楽が襲い掛かる。
「ん……♡」
たら、と下着が含みきれなかった白濁が、霊幻の内ももを流れていった。

あられもなく縄に下され悶える男たちを、縄神は満足気に眺める。

『『『善き哉』』』

すう、と縄神は消えて、ドアが現れた。

「……いや解いていけや！！！」
たまらずエクボが叫んだ。

「どーすんだよコレ！」
「実体化を解いて抜ければ……」
身じろぐ最上が、しばらくして遠い目をする。
「……私の呪いは解けているが、神々の結界がそのままで……抜けられないな……」
「馬ーーーー鹿！」
エクボが叫んだ。
「本当に馬鹿だな」
縄を足元に置いて、ヨシフは手首をコキコキと鳴らしている。
「……えっどうやって抜けたんですか！？」
「ん？縄抜けだ。仕事柄基本技能でな」
「そんなこといいから解いてくれ！！」
ヨシフは十徳ナイフを取り出して、統一郎の縄を切り始めた。
「わ、私の吊り方かなりキツくてだな……！」
「アンタは自業自得だろうが。順番だ順番」
ヨシフは縛られた順に縄を切っていった。
「助かりました。どうも身体にピッタリ巻きついてる縄をピンポイントで超能力で切るのは怖くて……」
「おう」
縄化粧を擦りながら茂夫が感謝するのに、ヨシフは軽く返す。
「色々大変なことになったが、出られない部屋というのは中々面白かったな。今度はオーソドックスに新隆くんと全員がヤらないと出られない部屋でも作るか」
「オイ」
霊幻がじとりと最上を睨む。
「あまりにも可哀想だからそれには親父を巻き込まないでやってくれよな……」
将が苦笑してそう言って、一行はカラオケボックスに消えていった。

終わり